

弥生の出雲王に出会える

季刊

第59号

(2025年10月)



出雲弥生の森博物館だより

IZUMO YAYOINOMORI MUSEUM

★秋季企画展

「出雲の弥生人なに食べた？」

10月4日(土)～12月22日(月)

今回の企画展は、奈良文化財研究所の庄田慎矢さんと総合研究大学院大学統合進化科学センターの吉永亜紀子さんに協力していただき、準備を進めてきました。

この土器、炊飯器？

出雲平野では多くの弥生土器が出土しています。その中で、甕形土器は蓋をして米を炊く「炊飯器」と考えられてきました。ただ、使用時から2000年以上も経ってから出土するこれらの土器は、空っぽの状態で見つかることがほとんどです。実際に何を調理したのかは、肉眼ではわかりません。そこで、土器の中になが入っていたのかを探索するため、庄田さんと協力して「土器残存脂質分析」を実施しました。

弥生の炊飯器？
(矢野遺跡)

土器を使って調理を行うと、内面や器壁の内部に食材の一部が付

着・浸透します。この土器が埋没するとそのほとんどは失われてしまいがちですが、火を受けて炭化したススやコゲは、土器の内外に残存することがよくあります。

「土器残存脂質分析」は、このような炭化物や器壁内部に含まれる脂質を対象として、土器がどのような動物の調理加工に用いられていたかを明らかにする手法です。脂質の状態がよければ、海産物、植物、反すう動物(シカなど)、乳製品などに由来することがわかります。

今回、出雲市の蔵小路西遺跡(渡橋町・小山町)の縄文時代から弥生時代移行期に作られた縄文土器49点と、矢野遺跡(矢野町)の弥生時代前期土器48点の分析を行いました。

その結果、矢野遺跡の土器には、サケ科または汽水湖や河口でとれる食材が主に入っていたようです。コメを集中的に調理した痕跡は認められず、弥生時代前期の出雲では、コメを炊く専用の土器(炊飯器)はまだなかったようです。

貝塚出土品を探索

出雲平野では矢野遺跡や姫原西遺跡、知井宮多聞院遺跡などで弥

生時代の貝塚が確認されていて、通常の遺跡では残りにくい動物骨が多く出土しています。そこで、出雲平野の貝塚出土の動物骨や貝類を吉永さんと協力して、1点ずつ調査しました。その成果を松江市西川津遺跡の貝塚出土品などとともに展示し、出雲の弥生人が食べていたものを紹介します。

吉永さんは貝塚出土品の調査の一環で、出雲から米子の海辺を歩き、現生打ち上げ貝を採集されました。その結果、チョウセンハマグリやベンケイガイ、イタヤガイなどの大きな貝は大社湾に限定されることを突き止めました。これにより、出雲市や松江市の遺跡で出土するこれらの大きな貝類は大社湾で採ったものだとなつてきました。このように多くの新知見を得ましたので、沢山の方に本企画展を観覧していただければ幸いです。

(坂本 豊治)

チョウセンハマグリ



ベンケイガイ

大社湾の打ち上げ貝(左)と西川津遺跡出土品(右)

★ギャラリー展

「知井宮多聞院遺跡」

「弥生時代の貝塚を探る」

9月3日(水)～11月24日(月)

知井宮多聞院遺跡は、出雲平野の西南部、出雲市知井宮町に所在します。遺跡内には真言宗寺院の養龍山多聞院があり、その境内にある貝塚は出雲市の史跡に指定されています。

出雲弥生の森博物館は、この遺跡の出土品を所蔵しており、2023～2025年にかけてこれらの再整理を実施しました。特に、弥生時代の土器や動物骨、貝類について新しい知見を得ることができました。その成果を今回のギャラリー展で紹介します。

1949(昭和24)年、大社考古学会が境内にある貝塚の発掘調査を初めて実施しました。その結果、土器や石器、動物骨、多量のヤマトシジミなどの貝類が出土しました。1958(昭和33)年には2回目の貝塚調査が実施されました。これを指揮したのが、明治大学考古学研究室の大塚初重氏(1926～2022)です。

この調査により、貝塚は弥生時代中期後葉(約2000年前)か

ら古墳時代前期(約1700年前)の約300年間に形成されたことがわかりました。

貝塚からは、イノシシやシカなどの骨や角が出土しています。これらをよく見ると、鋭く直線的に切断されたものがあります。鉄の刃物を使って動物を解体したり、骨や角を加工したりしたことがわかります。

チョウセンハマグリは、ヤマトシジミに次ぐ出土量があり、西へ約5km離れた大社湾まで出かけて採ったものと推測できます。

これまで、当館ではあまり取り上げられてこなかった遺跡ですが、出雲平野の重要な弥生遺跡のひとつです。知井宮多聞院遺跡を知っていただければ幸いです。

(坂本豊治)



知井宮多聞院遺跡出土品(1949年)

★速報展

「屋敷谷Ⅱ遺跡と」

「周辺のたたら製鉄」

9月17日(水)～

令和8年2月2日(月)

出雲市多伎町周辺は、江戸時代に田儀櫻井家のたたら製鉄で栄えた地域で、各地に製鉄関連の遺跡が残っています。今回取り上げる屋敷谷Ⅱ遺跡は、田儀櫻井家の製鉄業を支えたと考えられる山間部の集落跡です。出雲市文化財課では令和5年度から調査を実施しており、その成果をご紹介します。

屋敷谷Ⅱ遺跡で目を引くのが、大規模な石垣群です。高さ1.5m程の石垣がおおよそ100mにわたり3～4段構成で造られています。田儀櫻井家が製鉄業で栄えた江戸時代後期頃には集落で生活が営まれ、集落の地盤を安定させるために大規模な石垣が造られました。

発掘調査では鉄の小片を含んだ炉跡が見つかりました。集落内で小規模な鉄の加工が行われたようです。近くのたたら場に関連した鉄や物資の加工なども行われていたのかもしれませんが。屋敷谷Ⅱ遺跡は、田儀櫻井家が佐田町域で経営した山間部のたたら場と製鉄拠

点をつなぐ中間地点にあり、物流の中継地として田儀櫻井家の製鉄業を様々な面から支えたと考えられます。

また今回の速報展では、田儀櫻井家の製鉄拠点で鍛冶関連の遺構などが残る宮本鍛冶山内遺跡(多伎町奥田儀)や、製鉄炉の地下構造である床釣りが調査当時の状態で現存する朝日たたら跡(佐田町高津屋)など、屋敷谷Ⅱ遺跡周辺の製鉄遺跡についても解説していきます。この機会に是非ご覧ください。

(幡中光輔)



屋敷谷Ⅱ遺跡の石垣

★速報展

「須佐神社の棟札」

開催中！12月22日(月)



須佐神社本殿

出雲市佐田町に位置する須佐神社は、『出雲国風土記』(8世紀)に「須佐社」と記された古社です。中世には「十三所大明神」、近世には「須佐大宮」と呼ばれ、明治以後に現在の「須佐神社」となりました。主祭神の須佐之男命は、『古事記』や『日本書紀』にも記された全国的にもよく知られている神様です。この須佐之男命の本宮とされる須佐神社は、古くから篤い崇敬を集めてきました。須佐神社には、鎌倉時代後半の



須佐神社棟札
文久元年(1861)
(現在の本殿)

永仁6(1298)年から、昭和44(1969)年に至る膨大な数の棟札が残されています。棟札とは、上棟や修理のとき、工事の由緒、建築の年月日、建築者や大工などの職人の名前などを記した板のことで、造営・遷宮という最も重要な出来事の記録として多くの寺社に伝わっています。しかし、実際には自然災害や虫食いなどによって、失われることも珍しくありません。

今回、須佐神社に受け継がれた中世から現代に至る45点の棟札が、出雲市有形文化財に指定されました。須佐神社の棟札の重要性は、量の多さですが、さらに個々の棟札の保存状態の良さと、内容の豊かさも挙げられます。

当館では、出雲市の文化財指定を記念して、指定の内容や関連する古文書について、パネルで紹介しています。ぜひご覧ください。

(吾郷 誠)

★古文書の森をゆく(24)

★引札一枚持つて！

商売をするにはまず多くの人に店と商品の存在を知ってもらわなければなりません。広告は商売に不可欠なものとして昔から様々な手法が取られてきました。新聞やテレビ、インターネットの無い時代から現代まで変わらず使われている手法として、チラシがあります。現代ではポストに投函されるなど、直に手渡されることは少なくなりましたが、新規開店の時などお店の周りで配られているものをもらったことがある方は多いのではないのでしょうか。こうしたチラシは江戸時代から近代にかけて「引札」と呼ばれました。

引札は商品の説明や売り文句を書いたシンプルな構成のものや、絵入りの華やかなものまで多種多様な物が残されています。載っている物も、化粧品やお土産物から料亭の広告など様々です。しかし引札の多くは江戸や上方を中心とした大都市で作られたものがほとんどで、地方で作られることは稀でした。これが明治に入ると地方からの印刷注文が可能になり、次第に地方でも多くの引札が作られ

るようになっていきます。

出雲市域でも実際に配られた引札が残されています。出東村(斐川町)にあった呉服屋が、京都の染物屋の取次をしていると知らせる物には染物の工程を絵で載せて分かりやすく紹介しています。また今市本町(今市町)にあった酒屋の引札は、女神と恵比須が打ち出の小づちから小判を振りまく縁起の良いデザインになっています。

ある商家では、そうした縁起の良い絵に「〇〇呉服店大売り出し」などの宣伝文句を書き込んで印刷の注文をするデザインの見本帳も残されており、高い需要があったことが分かります。

遠い町まで商品や店の魅力を伝えていた一枚のチラシが、既に失われた店や品物の存在を今に伝えてくれます。(荒川 英里)



今市本町にあった酒屋の引札(出雲市蔵)

★展示のご案内

▼秋季企画展

開催中 12月22日(月)

「出雲の弥生人なに食べた？」

●ギャラリートーク【無料】

10月11日(土)、11月9日(日)、
12月7日(日)

いずれも10時から・申込不要

▼ギャラリー展

開催中 11月24日(月)

「知井宮多聞院遺跡」

「弥生時代の貝塚を探る」

●ギャラリートーク【無料】

10月11日(土)、11月9日(日)
いずれも11時から・申込不要

▼速報展

開催中 令和8年2月2日(月)

「屋敷谷Ⅱ遺跡と

周辺のたたら製鉄」

開催中 12月22日(月)

「須佐神社の棟札」

★講座・講演会のご案内

▼秋季企画展関連講演会

① 11月1日(日) 14時～16時

「ジジミだけじゃない!?—出土
動物遺存体から探る弥生時代の
食と多様な動物資源利用—」

●講師 吉永亜紀子氏

〈総合研究大学院大学

統合進化科学研究センター〉

② 11月22日(土) 14時～16時

「その土器、なにが入ってた？
—化学の目で見る弥生時代の料理—」

●講師 庄田 慎矢氏

〈奈良文化財研究所〉

秋季企画展関連講演会の申込について

定員 各80名／当日受付なし／無料
事前申込必須(電話・メール・FAX)

●申込受付時間 9～17時

●必須事項 氏名・電話番号

▼館長講座

① 10月4日(土) 14時～16時

「記憶する責任—戦後80年・
昭和100年によせて—1」

② 11月9日(日) 14時～16時

「記憶する責任—戦後80年・
昭和100年によせて—2」

③ 12月6日(土) 14時～16時

「記憶する責任—戦後80年・
昭和100年によせて—3」

●講師 花谷 浩(当館館長)

館長講座の申込について

定員 各80名／当日受付なし

各回 300円

事前申込必須(電話・メール・FAX)

●申込受付時間 9～17時

●必須事項 氏名・電話番号

★館長古来夢

わたしの住まう街に由緒正しい神社がある。揖夜神社。ご祭神はイザナミノミコト。このほど本殿の屋根修理が終わり、5月17日に正遷座祭が行なわれた。各町内は各々舟形の山車を連ねてお祝いした。わたしも行列に加わった。

揖夜神社の記録は奈良時代に遡る。「出雲国風土記」には「伊布夜社」として記載された。さらに『日本書紀』によると、斉明5(659)年、「神の宮」(出雲大社)の修理に際し凶事が重なったという。その一つは、犬が人の腕を啗えて「言屋社」に置いていたとの何とも不気味な事件だった。これらの異変は天皇が亡くなる凶兆だと注記された。実はその前年にも出雲国の北の海浜に魚が大量に打ちあがったとの報告があり、こちらは、百済が唐・新羅により滅ぼされる兆しとする。なぜ予兆が出雲国に現れるのか。それは日本の内と外の境と意識されたからではないか。

境はもう一つあった。神話では、黄泉国に住まうイザナミに会いにイザナキが出かけるが、イザナキの目に飛び込んだのはウジのたか

る妻の姿。逃げ帰ったイザナキは坂の上に大石を立てて道を塞ぐ。そこは出雲の「伊賦夜坂」だと『古事記』が伝える。揖夜神社の古名に通じる。出雲国は、生の世界と死の世界の境とも意識されていたのだらう。

魔物に出会うのは昼と夜との境「逢魔が時」と相場は決まっている。出雲国は古代人にとってはそんな「間の土地」だった、とわたしは想像している。

揖夜神社近くに「黄泉比良坂」があるにはある。が、江戸時代の地誌にその記載はない。なぜなら近代になって場所を定め顕彰したから。信じるか信じないか、それはあなた次第。

(花谷 浩)

(発行) 出雲弥生の森博物館

2025年10月

〒693-0011

島根県出雲市大津町2760

(TEL) 0853-25-1841

(FAX) 0853-21-6617

(E-mail) yayoi@city.izumo.shimane.jp

https://www.city.izumo.shimane.jp/yayoinomori

●入館料 / 無料

●開館時間 / 9:00～17:00
(入館は16:30まで)●休館日 / 火曜日
(祝日の場合は翌平日)
年末年始